

ブエリング航空の事件は反ユダヤ主義ではなかった。それはシオニストの物語戦争だった。

2025年7月23日、スペインのバレンシアにあるマニセス空港で、10歳から15歳までの約50人のユダヤ人の子供と青少年が、パリ行きのブエリング航空のフライトから降ろされた。イスラエルおよびユダヤ系メディアの初期報道によると、このグループは離陸前にヘブライ語の歌を歌っていただけで、突然かつ不当に排除されたという。イスラエルのディアスポラ担当大臣アミチャイ・チクリは、この出来事をすぐに「深刻な反ユダヤ主義的事件」と呼び、シオニストに同調するプラットフォーム全体で怒りの波を引き起こした。

しかし、ブエリング航空とスペイン当局は異なる話を語った。それは宗教的差別ではなく、航空安全法に対する繰り返しで危険な違反行為に関するものだった。文化的表現をめぐる単純な誤解とは程遠く、この事件は、誤った行為から注意をそらし、批判を封じ込め、ユダヤ人の被害者意識の物語を強化するために、反ユダヤ主義の告発を戦略的に武器化するという、憂慮すべきパターンを明らかにしている。これは、人種差別的、場合によってはジェノサイド的な行動の信頼できる告発に直面しても行われている。

知られている事実：混乱、改ざん、そして合法的な対応

7月24日と25日にブエリング航空が発表した2つの詳細な声明によると、このグループは「非常に破壊的な行動」と形容される行為に従事していた。それには以下が含まれる：

- 法的に義務付けられた安全ブリーフィングの繰り返しの中断
- 酸素マスクや救命胴衣を含む緊急装備の改ざん
- 高圧酸素ボンベへのアクセスを試みた疑い
- フライトスタッフに対する「対立的な態度」の示唆

航空会社の乗務員は状況を操縦室にエスカレートさせ、**EU規則CAT.GEN.MPA.105(a)(4)**に基づき、機長が安全を脅かす乗客を排除する権限を持つため、グループを降機させる決定が下された。**スペイン市民警備隊**がその排除を実行した。

重要なのは、子供たちを引率していた**21歳のユースキャンプのディレクターが逮捕され**、手錠をかけられ、当局への抵抗として起訴されたことである。特筆すべきは、観光客や若い乗客の軽微な不正行為を通常見過ごすスペイン当局が、力を行使し、正式な手続きを開始した点である。

ブエリングは、宗教や言語がこの決定に何の役割も果たさなかったと強調し、その後この主張に反する証拠は出てきていない。

人種差別的およびジェノサイド的な歌の告発

未検証だが、広く拡散されたソーシャルメディアの投稿や乗客の証言によると、グループはヘブライ語の歌を歌っただけでなく、「アラブ人に死を」「彼らの村が燃えるように」といった明白に人種差別的なスローガンを叫んだという。ある乗客は、グループがパレスチナ支持を表明した他の旅行者に対して唾を吐いたと主張した。

これが部分的にでも本当であれば、これらの発言はヘイトスピーチに該当する。そして、スペインが加盟するジェノサイド条約の第III条に基づき、ジェノサイドの直接的かつ公的な扇動は訴追可能な犯罪である。スペイン当局は対応する義務があった。

ここで不快な現実がある：法執行機関は、騒々しいフライトや膨らませた救命胴衣のためにユースグループのディレクターを手錠で拘束しない。しかし、人種差別的な扇動の信頼できる告発に直面したとき、特に国際的な乗客を巻き込む公共交通機関では、迅速に行動する。これらの告発はまだ検証されていないが、その信憑性と対応の比例性から、スペイン警察は単なる不正行為以上のものに対応した可能性が高い。

シオニストメディアが説明しない逮捕

当初から、シオニストに同調するメディアや当局者は、感情的に共鳴する単一の物語を押し出した：ユダヤ人の子供たちがヘブライ語で歌ったことで罰せられた。この物語は、以下のような事実を迅速に覆い隠した：

- 航空会社が記録した安全上の懸念
- 潜在的に重大な違反の存在
- グループの責任者の逮捕
- 人種差別の扇動の可能性

ブエリングと市民警備隊が詳細で慎重な説明を発表したにもかかわらず、著名な人物たちはこの出来事を宗教的ヘイトクライムとして枠づけすることを主張した。しかし、彼らはなぜスペイン警察が歌のために誰かを拘束するのかを説明することを拒否した。この物語は、行動の文脈を意図的に省略した場合にのみ成り立つ。そしてその省略は偶然ではない。それは戦略的である。

これがシオニストの戦略：被害者意識をそらしの手段として

懲戒事件を国際的な反ユダヤ主義スキャンダルに変えることは、孤立したエピソードではない。それは方法である。シオニストの言説は長い間、ユダヤ人の被害者意識を強調し、反応を引き起こした可能性のある政治的または行動的文脈を省略することに依存してきた。この戦術は、差別を証明することではなく、道徳的パニックを引き起こすことで機能する：ユダヤ人へのいかなる挑戦も反ユダヤ主義に根ざしていなければならない。

このパターンは、2023年10月7日のハマス主導の攻撃後、はるかに大きな規模で見られた。1,200人のイスラエル人の殺害と250人の拉致が世界的な恐怖で迎えられた一方で、その前に存

在した構造的暴力は消し去られた。パレスチナ人の大量拘束、ヨルダン川西岸でのパレスチナの子供たちにとって記録上最も死者数の多い年、そして違法な入植地の暴力的な拡大は、イスラエルの苦しみに道徳的スポットライトを固定するために脇に追いやられた。

その結果：**物語の非対称性**。一方は永遠の被害者として描かれ、もう一方は説明できない攻撃者として描かれる。たとえ数十年にわたる占領、収奪、アパルトヘイトに応答している場合でも。

子供もジェノサイドを唱えることができる

言うのは不快だが、必要だ：子供たちは人種差別的でジェノサイド的なレトリックに参加することができる。入植者の学校、超国家主義のキャンプ、イスラエルの軍事式典でそれを見てきた。もしブエリングの乗客が本当にアラブ人の死や彼らの村の破壊を唱えたのであれば、彼らの年齢はその行為の道徳的または法的重さを免除しない。

彼らが無垢の物語で守るのではなく、こうした事件は反省を強いるべきだ：**どのようなイデオロギー的訓練が、子供たちに商用飛行機で民族的暴力を唱えさせるのか？**そして、なぜその質問が攻撃的と見なされるのに、反ユダヤ主義の偽の告発はそうではないのか？

結論：これは宗教的迫害ではなく、物語戦争だった

ブエリング航空の事件は謎ではない。それは、シオニストの当局者やメディアが反ユダヤ主義の告発を武器化して責任から逃れる方法のケーススタディである。記録された安全違反、乗務員と法執行機関の比例した対応、グループのリーダーの逮捕はすべて、これが差別ではなく、**重大な不正行為**、おそらく人種差別的で犯罪的な性質のものであることを示唆している。

その後に起こったのは、馴染み深い歪曲だった：証拠から切り離されたシオニストの怒り、ユダヤ人の被害者意識を再中心化し、精査を抑圧するために展開された。

真実が重要なら、偽のバランスに抵抗しなければならない。正義が重要なら、事実とフィクションを同等に扱うことを拒否しなければならない。そして、本当の反ユダヤ主義と本当の人種差別を終わらせることを重視するなら、この事件を本当の姿で呼ぶことから始めなければならない：**物語操作の力によって責任を迫害に変える試み**。